

2. 惣作遺跡発掘調査報告書

(表紙)

惣作遺跡

愛知県大府市教育委員会

序

大府市は町制時代に『大府町史』を出版いたしました。以来、文化を尊重し、郷土を愛する声は一層たかまってきました。これも調いのある生活を求める大府市民の本来の心情のあらわれでありましょう。

名古屋市の隣接地として発展してきた大府は、昭和45年9月に市制を施行しました。現在も、市内の各地では、住宅の造成、工場の建設、道路の開通と、各種の土木工事が行なわれ、自然の変ぼうにも激しいものが見受けられます。このまま放置しておく、貴重な文化遺産が滅失するので、大府町史の史料充実と文化財保護の立場から遺跡の調査を計画いたしました。

まず、昭和43年・同44年の2回にわたって、名古屋大学に依頼して市内吉田町所在の古窯址を調査しました。この結果、大府の地で熱田神宮や京都の安楽寿院の瓦を古代に焼成したことが判明し、興味深いものをおぼえました。この詳細は『大府町吉田第1号窯調査報告』と題して、報告書を公開いたしました。

今回の惣作遺跡の調査は、第3次および第4次の計画によるもので、本書はその調査報告であります。題字は大府市長・大島武雄氏、本文の執筆は調査主任・加藤岩蔵氏にお願いいたしました。ここにいたるまでには、次の調査組織表に掲げた方々の炎暑にも負けない献身的なご努力と、土地所有者をはじめ地元関係者の深いご理解とご協力がありました。ここに記して、改めてお礼申し上げます。

最後に、惣作遺跡が大府市内における最古の遺跡であることが判明し、私たちの祖先の生活の一端にふれることができ、まことに意義深いものであります。今後、これを通して市民の文化財保護が一層活発になればと願っています。

昭和47年7月

大府市教育委員会

教育長 水野明治

惣作遺跡調査組織（敬称略）

- 調査主体 愛知県大府市教育委員会
- 調査責任者 大府市教育委員会教育長 水野明治
- 調査主任 日本考古学協会員・大府中学校教頭 加藤岩藏
- 調査員 大府市立大府中学校教諭 成田 勉
大府市立大府中学校教諭 川津 衛
前大府中学校教諭 深谷 巖
- 調査補助員
- ・愛知県立刈谷高等学校郷土研究クラブ
成田紀幸 夏目 宏 寺沢 隆 神谷宏海 稲垣広生 内藤 浩
 - ・愛知県立刈谷北高等学校郷土研究クラブ
西村規子 宮長さち代
 - ・大府市立大府中学校郷土研究クラブ
山口順子 永井あさみ 鳥田和彦 服部 守 花井治男 渥美広之
伴 貞美 奥 香津子 安井幸二
- 協力者
- ・大府市文化財保護委員会
村上四寿 大島鉄一 中井俊道 深谷菊之助 浅井恒道 坂野好文
浅田好逸
 - 大府市議会議員・前横根町区長 加藤 勲
 - 大府市議会議員 大島香苗
 - 惣作遺跡所在地所有者 大島時雄
 - 大府市横根町区長 大島英孝
 - 日本考古学協会員 立松 宏
 - 東海銀行員 大島都子
 - トヨタ車体KK社員 矢田直幸
 - 内海中学校教諭 山下勝年
- 調査事務 大府市教育委員会事務局
久野茂二 野田光輝 伊藤邦英 栗原 守
- 報告書執筆者 加 藤 岩 藏

目次

題 字……大府市長 大 島 武 雄

序 ……大府市教育長 水 野 明 治

はじめに
第1章 地形と位置
第2章 発見の動機と調査の経過
第3章 遺 構
(1) 第1トレンチ
(2) 第2トレンチ
(3) 第3トレンチ
(4) 第4トレンチ
(5) 第5トレンチ
(6) 第6トレンチ
(7) 第7トレンチ
(8) 第8トレンチ
第4章 出土遺物
(1) 土・陶器類
(2) 土 製 品
(3) 石 器
(4) 貝 類
(5) 動物の骨
第5章 後 論
(1) 惣作遺跡の変遷
(2) 弥生時代の惣作遺跡
(3) 衣ヶ浦湾沿岸における古代製塩

挿 図 目 次

第1図	衣ヶ浦湾沿岸の古代製塩遺跡
第2図	惣作遺跡附近の地形図
第3図	第1次・第2次発掘区平面図
第4図	第1トレンチ平面および西壁断面実測図
第5図	第1トレンチの土器出土状態実測図
第6図	第2トレンチ・第3トレンチ断面実測図
第7図	第4トレンチ・第5トレンチ断面実測図
第8図	第6トレンチ断面実測図
第9図	第7トレンチ・第8トレンチ断面実測図
第10図	第1トレンチ出土 土師器実測図
第11図	第1トレンチ出土 遺物実測図
第12図	第1トレンチ・第4トレンチ出土 遺物実測図
第13図	第2トレンチ出土 遺物実測図
第14図	惣作遺跡出土 弥生式土器拓影
第15図	第3トレンチ出土 遺物実測図
第16図	第5トレンチ出土 遺物実測図
第17図	第6トレンチ・第8トレンチ出土 遺物実測図
第18図	第6トレンチ出土 土製支脚実測図

図 版 目 次

図版1	空から見た惣作遺跡
図版2	(1) 第1号土師器の出土状態 (2) 第2号土師器の出土状態
図版3	(1) 第3号土師器の出土状態 (2) 惣作遺跡出土 弥生式土器
図版4	惣作遺跡出土 第1号土師器
図版5	(1) 惣作遺跡出土 平安朝瓦器 (2) 惣作遺跡出土 土師器・土鎌・土製支脚・石刃
図版6	(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その1) (2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その2)
図版7	(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その3) (2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その4)
図版8	(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その5) (2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その6)
図版9	(1) 惣作遺跡出土 弥生式土器・角形土器 (その7) (2) 惣作遺跡出土 弥生式土器・平安朝瓦器・角形土器 (その8)
図版10	(1) 惣作遺跡出土 土製支脚 (2) 惣作遺跡出土 土師器・行基焼

はじめに

愛知県地図を見ると、知多、渥美の二つの半島が三河湾を抱いて、蟹の手状に太平洋に向かって延びている。知多半島は東岸が知多湾に、西岸が伊勢湾に、それぞれ面している。知多湾の奥部を衣ヶ浦湾と称し、その西岸に大府市が存在している。その東岸は刈谷市である。

大府市は名古屋市の隣接町村の合併により、現在では名古屋市と行政境界を接するようになった。このため、名古屋市の発展に伴って、一層近郊都市の色彩を濃くし、人口の流入もめざましいものがある。最初に惣作遺跡の発掘調査を実施した当時の大府は町制であったが、第2次調査時には市制を施行していた。市内の各地では、土地造成、工場建設などがさかんに行なわれている。

行基焼の窯址以外には埋蔵文化財の少ない大府市は、古代製塩遺跡である惣作遺跡を保存するために、昭和45年に発掘調査を実施した。しかし、この調査結果を整理しているうちに、遺跡の性格について新しい問題が生じたので、昭和46年に第2次調査を実施した。

本論は惣作遺跡の第1次・第2次両調査の報告である。

第1章 地形と位置

知多半島と渥美半島に抱かれた三河湾のうち、知多半島と西三河平野とはさまれた海域が知多湾である。この知多湾の奥部で、西三河の矢作川口と知多半島の美浜町布土を結ぶ線から北方の海域を衣ヶ浦湾と称している。衣ヶ浦湾はかつて国道1号線附近まで入り込み、西三河平野あるいは西岸の知多半島の各所に支谷を形成していたが、現在、支谷は沖積地となって農地あるいは宅地に利用され、その低位を河川が流れて衣ヶ浦湾にそそいでいる。その主な河川には、境川、逢妻川、猿渡川、阿久比川、石ヶ瀬川などがある。現在の衣ヶ浦湾頭は、境川、逢妻川などの土砂の運搬によって沖積地化がすすみ、東浦町附近、すなわち国道第1号線より南方約8kmまで後退している。惣作遺跡は現在の湾頭より約5kmほど奥の沖積地上に立地している。惣作遺跡の東方約400mのところには境川が南流している（第1図）。

境川は尾張と三河の国境をなし、その上流の兩岸近くには丘陵がつかっている。この丘陵は尾張と三河の国境にあたる猿投山の東南から西南に向かって延びたもので、東岸側は井ヶ谷丘陵、西岸側は尾張丘陵と称されている。尾張丘陵は大府市城を経て更に南に延び、知多

半島の嶺をなしている。知多半島の丘陵部をとくに知多丘陵と称し、これを嶺として知多半島は伊勢湾側と三河湾側とに分けられている。東岸の井ヶ谷丘陵の南には洪積層の碧海台地が開けている。

西岸の尾張丘陵は主として瀬戸層、知多丘陵は主として常滑層よりそれぞれなり、両層はともに新第三紀鮮新世に属している。なお、知多丘陵の標高10m内外の縁辺には洪積層がみられる。この洪積層は、境川沖積地を横断する東海道新幹線の橋脚柱状地質図（注1）によると、境川沖積地の下位を通過して碧海台地の洪積層に続いている。そして、境川沖積層とこの洪積層とが接する沖積層基底には、貝殻が混入している礫層が堆積している。

また、境川に並行して境川沖積地を縦断する中部電力知多火力線鉄塔の柱状地質図（注2）によると、沖積層の下位に洪積層が存在し、衣ヶ浦湾頭に近づくに従って次第に深くなっている。とくに、惣作遺跡の東方約400mの地点に建設された鉄塔（第2図の塔II）の柱状地質図によると、現在の地表面から約2mの下位に厚さ約1.5mのシルト質中粒砂質層が存在し、更にこれに小礫混り粗粒砂質層が続き、その下層に洪積層が堆積している。シルト質中粒砂質層はもちろん、小礫の混った粗粒砂質層からも海水産貝の殻が検出され、沖積統基底層があることが確認されている。これは、かつてこの鉄塔の地まで衣ヶ浦湾が湾入して海をなしていた証拠であるともいわれている。これに近い惣作遺跡の地も例外ではなかったであろう。

そして、これが長年の間に衣ヶ浦湾に流入する河川の運搬した土砂の堆積によって沖積地化がすすみ、弥生時代には生活の舞台に利用できるほどに、高度に陸地化が発達したとみるべきである。現在、標高2mの惣作遺跡の地表は畑に利用されているが、遺物の包含層はこれにより下位で、最古の弥生式土器は基盤である砂堆中より出土する。

遺跡の地籍は愛知県大府市横根町惣作100・101・102番地が中心で、その附近に広がっている。

第2章 発見の動機と調査の経過

この遺跡が一般有識者の間に知られるようになったのは、昭和41年6月に刊行された大府町史に、故深見文夫氏が執筆してからで余り古くない。それまでは一部の考古学研究者に知られていたのみである。これも、衣ヶ浦湾沿岸の遺跡のうちで、発見が最も遅かった結果であろう。

惣作遺跡の発見は昭和32年である。この頃、隣接の刈谷市では市誌編纂事業が計画され、しばしば市誌編纂委員会が開かれていた。ある日の市誌編纂委員会で、隣接市町との関係を

研究調査することが決定され、該当市町の地方史研究家の協力をうることになった。大府町では横根在住の大島義光氏が推挙された。後日、筆者は大島氏に接する機会をえた。そのとき、大府町にも町史編纂の計画があり、考古学的資料の収集のために作製された遺跡分布図を見せられた。それには、亡父加藤巖がかつて土器を採集した横根共同墓地付近に遺跡記号が無記入であった。亡父が採集した状態を大島氏に話し、精査を頼った。その十数日後、大島氏が遺跡分布図と採集品を持参して拙宅へ来られた。採集品は角形土器の脚であった。採集地点は今回発掘した地点である。そして、昭和32年3月29日、大府町教育委員会に招かれ、大島氏・築波宗二氏・野田光輝氏らの案内で、大府町内の遺跡を踏査する結果となった。この折に遺跡であることを確認し、小字名を冠して惣作遺跡と名付けた。さらに角形土器は、道路（現在は国道155号線）を隔てた南の畑にも分布していることが判明した。

遺跡であることを確認して以来、筆者は衣ヶ浦湾沿岸の市町が刊行した市町誌をはじめ、附近の遺跡の調査報告にもしばしば惣作遺跡を発表した(注3)。大府町史には、発掘調査を実施しないままに、採集遺物を資料として記述されている。このため、層序的变化など遺跡の詳細な性格をとらえることができなかった。第1次の調査は遺構の性格とその範囲を確定することを目的として、発掘調査を行なった。

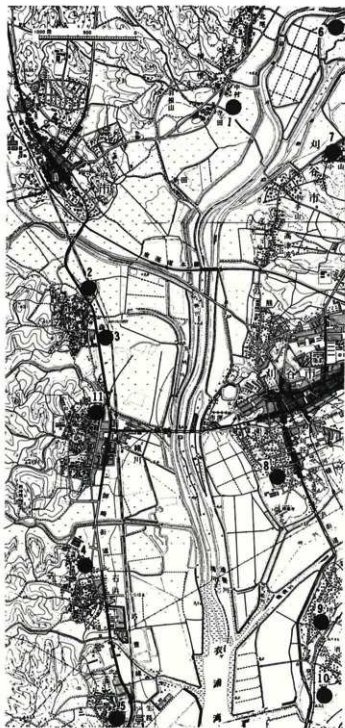
昭和45年7月25日 土曜日

発掘調査の協力を依頼した愛知県立刈谷高等学校・愛知県立刈谷北高等学校・大府中学校の郷土研究クラブ員諸君および大府町教育委員会関係者には、発掘調査を9時より開始する旨を事前に通知しておいた。このため、9時までに発掘用器具を現地に運搬しなくてはならない。加藤・深谷調査員と町教育委員会の野田・伊藤両氏が大府中学校に集合して、小型トラックに発掘用器具を積み込み、現地へ運ぶ。

9時直前に現地に到着すると、町教育委員会関係者と大府中学校郷土研究クラブ員の出迎えを受けた。まず休憩用のテントを調査地点の近くに張る。この下で、加藤が参加者全員に今回の惣作遺跡調査の主旨と発掘上の留意点および衣ヶ浦湾沿岸の考古学的特色などについて説明する。

説明終了後、発掘地点を選定して、南北10m東西2mの縄張りをし、第1トレンチと名付けた。まず表土の排除を行なう。だが主力が大府中学校郷土研究クラブの諸君であるためか、作業能率は上がらず、いささか困っていた。10時30分ごろにいたって、刈谷高等学校郷土研究クラブ員の諸君が参加し、さらに刈谷北高等学校郷土研究クラブ員諸君の参加もあって、作業は一層はかどった。あやふまされていた表土の排除も午前中に終り、下位の黄灰色砂質土層にあたる。

午後は14時より作業を開始する。参加者の数も増加したので、遺跡の広がりを確認するた



- 1 : 惣作遺跡
- 2 : 取手遺跡
- 3 : 塩田遺跡
- 4 : 石浜貝塚
- 5 : 生路貝塚
- 6 : 半崎遺跡
- 7 : 天子神社貝塚
- 8 : 本刈谷貝塚
- 9 : 小垣江貝塚
- 10 : 小垣江新田遺跡
- 11 : 入海貝塚

第1図 衣ヶ浦湾沿岸の古代製塩遺跡



第2図 惣作遺跡(X)附近の地形図 (縮尺1:1000) (数字は標高を示す)

めに、第1トレンチの南壁を西方へ約10m延長した地点に、東西2m南北3mの第2トレンチを設定する。第1トレンチは面積も広いので刈谷高等学校郷土研究クラブが主力で第2トレンチは大府中学校郷土研究クラブが主力で、それぞれ発掘をすすめる。

第1トレンチでは表土層の下位に堆積していた黄灰色の砂質土層を排除する。この黄灰色有機砂質土層は土質がやわらかく、発掘作業は比較的労力を要しなかったため、短時間に排除することができた。この層の上半部からは内耳鍋の破片や天目茶碗の破片が出土した。

第2トレンチでも、第1トレンチと同様に、表土層の下位に黄灰色砂質土層が堆積していた。この層の下位には、第1トレンチではみられなかった茶褐色有機砂質土層が薄くおいていた。これまでの作業は順調に進み、作業終了時には黄褐色有機砂質土層と西北隅に現われた粘土層の調査を残すのみとなった。

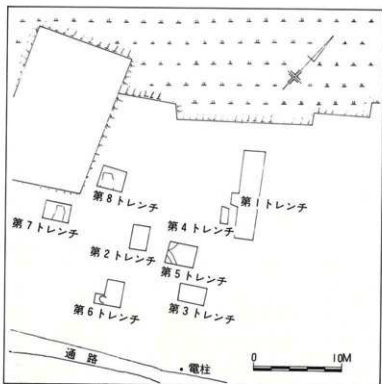
本日は1日中暑さがきびしかったが、初日とあってか、作業が順調にすすんだ。

7月26日 日曜日

作業は8時30分より開始する。本日は日曜日とあって矢田直幸氏、大島郁子氏ら発掘経験者の参加をえた。

作業は昨日に続いて第1トレンチは黒褐色有機土層を、第2トレンチは黄褐色有機砂質土層を排除する。黒褐色有機土層は表土層や黄灰色砂質土層に比較して強く、作業はやや困難をきわめた。が、遺物の出土量は圧倒的に多く、調査者たちの調査意欲を一層たかめた。

第1トレンチでは黒褐色有機砂質土層の下に、断続的ではあるが貝層の存在が確認された。



第3図 第1次・第2次発掘区平面図

この貝層はトレンチのほぼ中央で切れて、海浜性砂層が広がっていた。まさに海岸線の復元の感がある。

第2トレンチでは、昨日確認した茶褐色有機砂質土層下の黒褐色有機砂質土層と粘土層を排除する。黒褐色有機砂質土層は堅くしまっていたが、粘土層はこれ以上に堅く、発掘に困難をきわめた。そのうえ、粘土層からは遺物が出土しなかった。

午後は14時より作業を開始する。

第1トレンチでは午前中に調査が完了できなかつた貝層をはく。わずか2時間の休憩であったが、この間に乾燥して堅くしまり、発掘はいささか苦勞する。しかし遺物が多量に出土するので調査員たちは喜んでた。遺物は角形土器片が圧倒的に多く、その形態は黒褐色有機砂質土層のそれと同類であった。貝層下には暗黒褐色の有機砂質土層が広がっており、その厚さは10cm内外であった。この有機土層を調査していると、海浜性砂層との境で範囲40cm×50cmを粘土でかためて焼きしまった遺構が検出された。なお、中央部には土師器1個体が粘土に附着しており、調査員たちを緊張させた。この調査は作業終了時に近くなって完了した。さっそく第1トレンチの西壁断面図と土器が附着した遺構の実測図を作製する。

第2トレンチでは黒褐色有機土層を整理すると、その最下部には粘土層の端より礫が敷き詰められた状態が検出された。このため、礫の状態を追求するために粘土層を排除する。すると、礫の混じった暗黒色土層が存在し、礫の下に及んでいた。暗黒褐色有機砂質土層から出土した遺物は、第1トレンチの暗黒褐色有機砂質土層から出土した遺物と同型式の角形土器が主であった。

発掘区の平板測量は刈谷北高等学校の大島・西村・宮長の三君が担当する。貝層の貝の分類は刈谷市図書館主事・平野大治氏が担当する。

7月27日 月曜日

作業の開始は午前8時30分。昨日、調査を完了した第1トレンチに現われた貝層の広がり状態を追求するために、第1トレンチの南7mの地点に東西3m南北2mの第3トレンチを設定する。また、第1トレンチの貝層の西方へ状態を求めた第2トレンチの遺構状態を考慮に入れて、第1トレンチの西壁寄りに幅1mの壁を残して、それに平行に東西1m南北2mの第4トレンチを設定する。

第3・第4トレンチの縄張り終了後、調査者を3班に編成する。第1班は第3トレンチを、第2班は第4トレンチを、第3班は測量を、それぞれ分担する。第3トレンチも、第4トレンチも、ともに発掘面積が狭いうえに土質も柔かったため、作業は順調にすすみ、午前中に黒褐色有機砂質土層まで掘り下げることができた。とくに第3トレンチでは黒褐色有機砂質土層の上半部をはぐと、北壁寄りにブロック状になって混土貝層があらわれた。

午後の作業は13時30分より開始する。第3トレンチも、第4トレンチも、作業を開始して1時間程度で地山である砂層に達した。各トレンチとも実測図の作製にとりかかる。層序に複雑な変化が余りみられなかったため、実測図の作製も簡単に17時ごろに完了した。遺物、発掘器具などの整理を行なう。その後、各トレンチの発掘あとの埋めもどしを行ない、調査の全日程を終了する。

第1次調査で出土した遺物のなかに、数片の弥生式土器が存在した。しかも、その文様は弥生中期に比定されている獅子懸式土器と同じである。この弥生式土器の出土状態とその遺構を求めて第2次調査を計画する。

昭和46年7月22日 木曜日 曇ときどき雨

9時に現地に集合するよう、大府市教育委員会より調査関係者に通知がでていた。加藤、市教育委員会の伊藤係長・栗原主事および大府中学校郷土研究クラブ顧問・川津教諭の4名は、発掘器具を現地まで運搬するため、8時30分、大府中学校に集合して、器具をトラックに積み込む。

現地に到着したのは9時5分前。すでに大府中学校郷土研究クラブ生徒をはじめ、調査関

係者は集合していた、このなかには大府市議会議員加藤勲氏や横根町区長大島英孝氏ら地元の方々の顔も見え、発掘作業の協力の申し出を受けた。発掘作業の主力は大府中学校郷土研究クラブ生徒で、広大な発掘は望めないと事前に考えていた。が、この申し出のため、さっそく予定していた面積よりも広くトレンチを設定する。

まず、昨年調査した第2トレンチの東方約2mの地点に、東西3m・南北2mの第5トレンチを設定し、つづいて、第5トレンチの西南約5mの地点に、南北3m・東西2mの第6トレンチを設定し、それぞれ2班に分かれて調査を開始する。

調査中、ときどき小雨がばらついたが、初日とあって調査員らは元気に作業をすすめる。しかし、午後は小雨のばらつきが激しくなり、ときどき作業を中断した。しかし、鍛錬いに慣れた地元の人々の協力もあって、調査は順調にすすみ、終了時の17時近くには基盤直上まで発掘することができた。

7月23日 金曜日 雨

昨夜来の雨も小降りになり、空にはところどころ雨雲の切れ目が見えた。晴天になるのを願って現地におもむく。現地には、すでに調査関係者が集合していた。調査開始時間になっても雨はやまず、テント内で待機した。しかし、10時ごろになっても雨はやまないで、昨日採集した遺物を洗って整理をする。この遺物を標本にして、古代における製塩法をはじめ、衣ヶ浦沿岸の考古学的研究について説明する。説明が終っても雨は小降りにならず、むしろ本降りとなってきた。そこで、昼食をたべて解散する。

7月24日 土曜日 曇のち雨

どんよりと曇った日である。現地は砂質土壌であるため排水状態は良好であった。そのうえ、調査経験の豊富な日本考古学協会員立松宏氏をはじめ山下勝年氏、大島郁子氏らの応援をえた。さっそく、東西3m・南北2mの第7トレンチと南北2m・東西3mの第8トレンチを設定して発掘にとりかかる。前日の雨と砂質土壌であるため、発掘はきわめて順調にすすみ、午前中に発掘は完了する。

午後は4つのトレンチの実測図の作成に主力をおく。立松、山下、大島、川津の4氏がそれぞれのトレンチを担当して、約2時間で実測図の作製を完了する。

17時に第2次調査の日程を完全に終了する。

第3章 遺 構

現在、遺跡は畑として利用され、その表面は耕作によって比較的平坦のように見られるが、

詳細に実測すると中央部が微高をなしていた。この微高地付近で遺物が散在していた地点を中心に、4本のトレンチを設定して調査した。

第1トレンチ (第4・5図) 遺跡の北西部には水田が広がっている。微高地よりこの水田に向かって、南北10m、東西2mのトレンチを入れる(第1トレンチ)。層序は、基点より約5m近くまでは表土層、黄灰色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層、貝層あるいは混土貝層、暗黒褐色有機砂質土層の5層よりなっていたが、その先は表土層、黄灰色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層の3層よりなり、貝層あるいは混土貝層と暗黒褐色有機砂質土層は見られなかった。そして、基盤はともに海浜性砂層で、深くなるにしたがって礫の混入量が多くなっている。

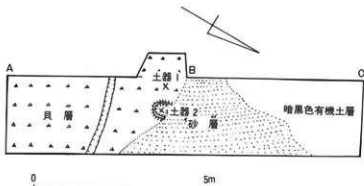
表土層は厚さ20cm内外で、水田に向かってわずかに傾斜を示している。そして、この層からは遺物の出土はなく、耕作地に利用されているため、堆肥などの有機物が多量に混入していた。

黄灰色有機砂質土層は約20cmの厚さで、発掘区全面に広がっていた。この層にまじっていた砂土は丘陵より風が運搬したものと考えられるもので、土質も柔らかく排土作業もきわめて順調に進んだほどである。出土した遺物は行基焼の山茶碗、天目茶碗、内耳鍋などがある。

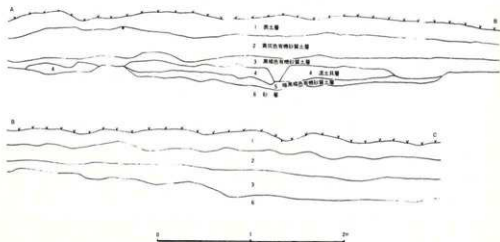
黒褐色有機砂質土層は基点の近くで厚さ5cm内外を示し、基点より遠ざかるにしたがって厚くなり、水田に最も近い地点で厚さ20cmが計測される。出土した遺物には灰釉の施された平安朝甕器と角形土器の脚部および土師質土器片がある。土師質土器片は角形土器の坏部の破片である。

貝層は基点より5m近くまで厚さ10cm内外を示している。が、基点より約1mから3m附近までは混土貝層状を呈し、その先は純貝層の状態をなしている。そして、5m先は貝層がなくなっている。貝層の組成貝類はオキシジミとマガキが圧倒的に多量を占め、この中にハイガイ、ヤマトシジミなどがわずかに混入している程度である。この他の自然遺物には獣骨がある。出土した人工遺物には、奈良朝様式須恵器および角形土器の土師質の坏部と角形の脚部とがある。土錘も1個出土している。

最下層は基盤である砂層を掘りくぼめた状態の中に堆積した暗黒褐色有機砂質土層である。層の厚さは50cm内外で、層中より土師器片と角形土器が出土する。とくに、基点より5m附近では、暗黒褐色有機砂質土層が円形状に広がり、基盤である海浜性砂層と接する暗黒褐色有機砂質土層から1個体の土師器(第5図下段)が出土した。この土師器は、40cm×50cmの範囲を粘土でかためた馬蹄形の中央部に、焼きしまった粘土に固着していた。カマド跡と考えられる遺構である。この遺構より50cmほど離れた地点にも、焼きしまった粘土に固着した土師器1個体(第5図上段)と胴部以下が欠損した土師器(第10図2)1個が検出された。



第4図の1 第1トレンチ平面図



第4図の2 第1トレンチ西壁断面実測図

基盤である砂層は、海浜の砂の層である。この砂層は深くなるにしたがって礫の混入量が多くなっている。そして、この層よりきわめて少量であるが、弥生式土器が出土した。

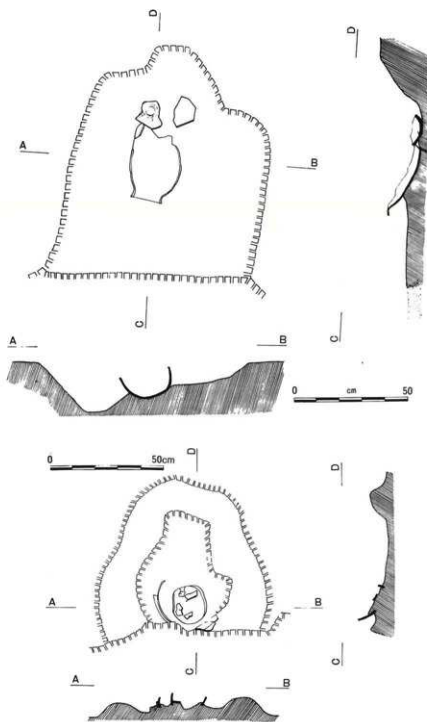
第2トレンチ（第6図） 面積は東西2m、南北3mの6㎡で、第1トレンチの西南約10mの地点にあたる。層序は表土層、黄灰色砂質土層、茶褐色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層、粘土層、暗黒褐色有機砂質土層、混礫暗黒褐色砂質土層の7層よりなる。

表土層の上半部は、現在、農地に利用されていて表面に起伏があり、その厚さは一定しない。が、平均15cm程度で遺物の出土は見られない。

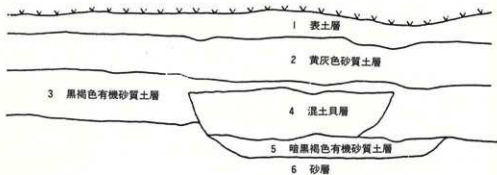
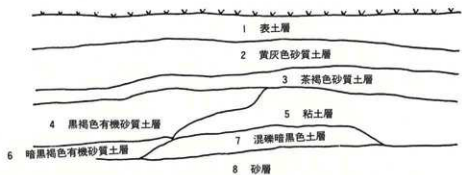
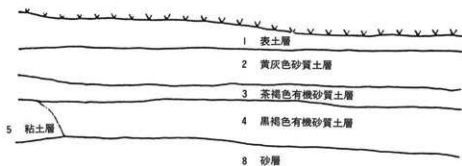
黄灰色砂質土層は厚さ20cm内外で、層の中より内耳鍋、古瀬戸陶器が出土し、第1トレンチの黄灰色砂質土層と形成期を同じくする層であると考えられる。

茶褐色有機砂質土層が黄灰色砂質土層の下位に約70cmの厚さで堆積していた。層から灰軸の施された平安朝甕器と角形土器が混出する。

この層の下位には、黒褐色有機砂質土層と粘土層とがほぼ同じ高位で堆積していた。そして、両層の接触面は切り違い状であった。黒褐色有機砂質土層は、粘土層の下部より敷きつ



第5図 第1トレンチの土器出土状態実測図
(上段：第1号土師器、下段：第2号土師器)

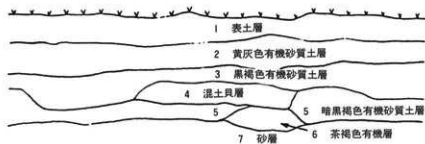
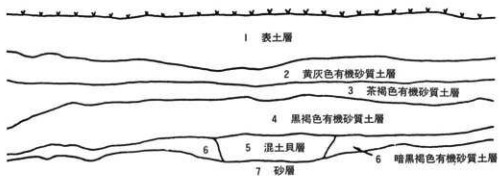
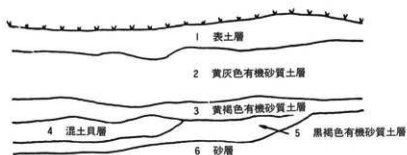


第6図 第2トレンチ・第3トレンチ断面実測図

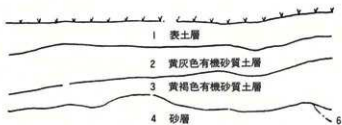
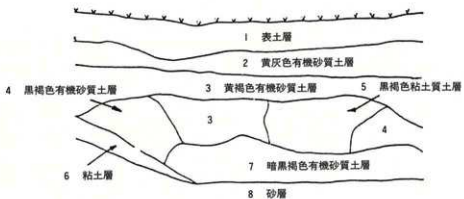
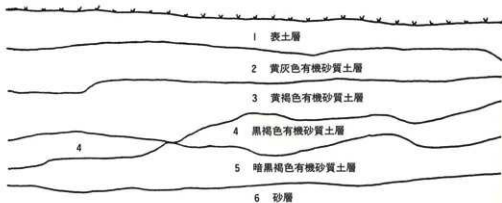
上段：第2トレンチ北壁

中段：第2トレンチ西壁

下段：第3トレンチ北壁



第7図 第4トレンチ・第5トレンチ断面実測図
 上段：第4トレンチ東壁
 中段：第5トレンチ南壁
 下段：第5トレンチ東壁

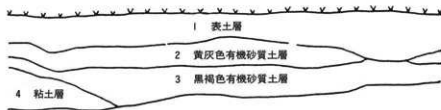
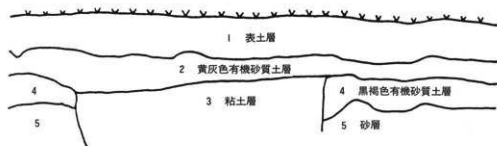


第8図 第6トレンチ断面実測図

上段：東壁

中段：西壁

下段：南壁



第9図 第7トレンチ・第8トレンチ断面実測図
 上段：第7トレンチ南壁(上図)東壁(下図)
 下段：第8トレンチ南壁(上図)東壁(下図)

められた拳大の礫層を境にして、上半部は炭化物を多量に混入した粘土質土層よりなり、下半部は砂土を多量に混じえた有機土層よりなっている。上半部の黒褐色粘土質有機土層からは角形土器と平安朝甕器が、下半部の黒褐色砂質有機土層からは角形土器と奈良朝様式須恵器が、それぞれ出土した。

粘土層はきわめて堅く、表面は踏み固められた状態で、出土品は1片も検出できなかった。が、黒褐色粘土質有機土層が堆積したところに、意図的に構築された遺構と考えられる。

暗黒褐色有機砂質土層は、上半部が砂を含んだ砂質有機土層より、下半部は礫を混入した有機土層より、それぞれなっていたが、両層からは角形土器が検出されたのみである。

第3トレンチ (第6図) 第1トレンチのほぼ南方に位置する。面積は東西3m、南北2mの6㎡である。層序は表土層、黄灰色砂質土層、黒褐色有機砂質土層の3層が主体をなしている。が、黒褐色有機砂質土層の北壁寄りに、貝殻が混在した径約1mの竪穴状遺構があらわれた。この遺構の下位には薄い暗黒褐色有機砂質土層が堆積している。

表土層は15cm内外の厚さで、現在、農耕地に利用されているため、層には最近の有機物が混入している。

黄灰色砂質土層は、まったく第1・第2トレンチのそれと、土質を同じくするもので、出土遺物も内耳鍋、古瀬戸陶器、行基焼が検出された。

黒褐色有機砂質土層からは角形土器の脚が数個と土師質の坏部が出土したのみである。同一層位にあたる竪穴状遺構内からは貝類の他に奈良朝様式須恵器と角形土器が混出した。

薄い暗黒褐色有機砂質土層からは角形土器が検出された。その量は余り多くない。

第4トレンチ (第7図) 第1トレンチの西壁に1m隔てて平行に、東西1m、南北2mのトレンチを設定する。これが第4トレンチである。層序は表土層、黄灰色有機砂質土層、黄褐色有機砂質土層、混土貝層、黒褐色有機砂質土層の5層からなる。

表土層は厚さ20cm内外で、現在、畑として利用されているため、層には新しい有機物が含まれている。

黄灰色砂質土層は厚さ20cm内外で、砂が相当量まじった土壌であるため、層の締りは余り堅くない。遺物は検出できなかった。

黄褐色有機砂質土層の厚さは10cm内外で、炭化物を多量に含んでいる。層からは角形土器と平安朝甕器が混出する。

混土貝層は厚さ10cm程度で、組成貝類はオキシジミとマガキが多量を占め、ハイガイ・ヤマトシジミなどがわずかではあるがこれについている。人工遺物には角形土器と奈良朝様式須恵器の広口壺がある。

最下層には、黒褐色有機砂質土が薄く堆積している。そして、基盤である砂堆へと続いて

いる。黒褐色有機砂質土層からは角形土器が出土する。

基盤である砂堆は、深度を増すにしたがって礫の混入量が多くなる。このなかより石刃1個を検出した。

第5トレンチ（第7図） 面積は東西3m、南北2mの6㎡で、第2トレンチの東方約2mの地点にあたる。層序は表土層、黄灰色有機砂質土層、茶褐色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層、暗黒褐色有機土層、混土貝層の6層よりなる。

表土層は耕作土として利用されている。層の厚さは30cm内外で、遺物は角形土器片が2個出土したのみである。この角形土器は後世の攪乱によるものと考えられる。

黄灰色砂質土層は第1トレンチ・第2トレンチとの黄灰色砂質土層と層を同じくするものである。厚さは20cm内外であるが、内耳鍋、古瀬戸陶器が出土した。

茶褐色有機砂質土層は厚さ10cm内外である。上位の黄灰色砂質土層と下位の黒褐色有機砂質土層との中間の層である。第1次調査における第2・第4トレンチではかすかに検出された層である。出土遺物には行基焼がある。

黒褐色有機砂質土層は厚さ約20cmで、北方に従って薄くなっている。西壁および南壁に幅約70cm、厚さ20cmの貝層がブロック状に現れた。発掘区内ではこの両壁の貝層が溝状をなしていた。黒褐色有機砂質土層の中からは角形土器が多量に出土した。その他は平安朝甕器、土師質土器片、奈良朝様式須恵器片が少量出土したのみである。とくに、貝層は上部が混土貝層で下部はマガキを主とする純貝層の状態であった。この貝層からは深い整形痕を有する須恵器が出土した。

暗黒褐色有機砂質土層が基盤の砂層上に厚さ5cm内外で広がっていた。層からは角形土器が出土した。

基盤の砂層中より弥生式土器が出土した。

トレンチの西北隅にきわめて堅くしまった茶褐色有機土層が発見されたが、追及する途中で消滅した。

第6トレンチ（第8図） 第5トレンチの南約5mの地点に、東西2m・南北3mのトレンチを設定し調査した。これが第6トレンチである。層序は表土層、黄灰色有機砂質土層、黄褐色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層、暗黒褐色有機砂質土層の5層からなる。

表土層は畑に利用され、層の中には有機物が混入していた。遺物は出土しなかった。

黄灰色有機砂質土層は厚さ20cm内外で、南から北にむかってしだいに厚くなっている。出土した遺物には土釜、古瀬戸陶器、行基焼などがある。茶褐色有機砂質土層がこの層の下位に続いている。

茶褐色有機砂質土層は厚さ20cm内外である。平安朝甕器の破片が4点ほど出土した。

黒褐色有機砂質土層は厚さ30cm内外であるが、南になるにしたがって薄くなり、南壁の断面には層が存在しなかった。出土した遺物には、角形土器、平安朝瓷器がある。

暗黒褐色有機砂質土層は厚さ20cm内外であるが、北にゆくにしたがって薄くなっている。西壁と南壁の角、すなわち発掘区の西南隅附近では暗黒褐色有機砂質土層を切断して粘土で半円形にかためられていた。その中央部には拳大の礫が約70個ほど敷きつめられ、しかも石は火にかかった痕跡がみとめられる。この層からは角形土器、土製支脚および整形痕のある奈良朝様式須恵器片が4例ほど出土した。とくに角形土器の坏部の大きい破片と脚部とが比較的近距离に存在した。土製支脚は礫だまりの近くから多く出土した。

第7トレンチ（第9図） 遺物の分布状態を求めて、東西3m・南北2mのトレンチを設定した。南壁よりに現われた層序は表土層、黄灰色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層および黒褐色有機砂質土層と基盤の砂層を切断した厚さ約40cm、幅1m40cmの粘土層がみられる。

表土層は畑に利用されている。厚さは20cm内外であるが、遺物には角形土器、古瀬戸陶器、行基焼、平安朝瓷器などの小破片が混出した。

黄灰色砂質土層は厚さ20cm内外であるが、西方にしたがって薄くなっている。出土した遺物には、表土層と同類の角形土器、古瀬戸陶器、行基焼、平安朝瓷器などがある。

黒褐色有機砂質土層は厚さ約20cmで、出土遺物は角形土器、平安朝瓷器に限られている。しかも、角形土器の脚は比較的完形のものが多くみられた。

粘土層は厚さ約40cm、幅1m40cm、長さ約1m50cmのタタキ状の非常に堅い層で、発掘区内に平面の形が長方形にあらわれた。遺物は検出されなかった。

第8トレンチ（第9図） 惣作遺跡の後背湿地で、現在水田に利用されている低地にもっとも近い地点に、南北2m・東西3mの第8トレンチを設定して調査をする。層序は表土層、黄灰色有機砂質土層、黒褐色有機砂質土層、粘土層の4層よりなる。

表土層は畑として利用されているため、厚いところ、あるいは薄いところと変化はみられるが、平均20cm内外である。遺物は出土しない。

黄灰色有機砂質土層は厚さ15cm内外であるが、東方より西方にむかって、また南方より北方の水田にむかってそれぞれ薄くなっており、遺物の出土量はきわめて少なく、角形土器が2個出土したのみである。

黒褐色有機砂質土層は南方より北方にむかって薄くなっている。とくに南壁のはほぼ中央に黒褐色有機土層を切断して砂層を掘り凹めたように築造した粘土層が確認された。黒褐色有機砂質土層からは角形土器がわずかばかり出土した。

粘土層は表面がふみかためられてタタキ状をなし、非常に堅く発掘に困難をきわめた。出

土した遺物は粘土層上より角形土器が出土した。

基盤である砂層の中からは弥生式土器片が出土した。

第4章 遺物

遺物は発掘調査をしたすべてのトレンチ、すなわち第1トレンチより第8トレンチにいたるまで出土したが、なかでも発掘面積の最も広い第1トレンチよりの出土量が圧倒的に多く、しかも完形に近い土器が検出されている。遺物の出土総量はミカン箱4箱分で、その種類は土器、陶器、土製品、石器の人工遺物の他に、貝類、獣骨の自然遺物もある。

1. 土・陶器

土・陶器類には、弥生式土器、土師器、奈良朝様式須恵器、平安朝甕器、行基焼、古瀬戸陶器、土鍋類などがあるが、最も多量に出土したのは製塩土器である。

弥生式土器（第14図）

第1トレンチの基盤である砂堆中と第5・第8両トレンチの基盤である砂堆中より出土した。すべて破片であるが、器形は壺形と甕形である。

壺形土器の破片は口辺部、頸部、胴部に分類される。口辺部は外反した口縁が直上して受け口状を呈し、その外面に太い凹線を5条めぐらしているもの。頸部はヘラ状器具によって圧痕を加えた凸帯を2条めぐらし、その下に細い櫛状器具による十数条の横線文とヘラ状器具による斜格子文とを交互に配して飾っているもの。胴部は細い櫛状器具による十数条の横線文をめぐらしたり、ゆるやかな波文をほどこしているものなどがある。

甕形土器の破片は口辺部のみである口縁端に単位の圧痕をほどこしているものと、連続圧痕をほどこしているものとの2種類がある。

これらの弥生式土器は、知多半島における弥生中期前葉に編年されている知多市八幡・野崎遺跡出土の第II群土器、弥生中期中葉に編年される獅子懸式土器(注4)、および弥生式中期後葉に尾張・三河全域に盛行した長床式土器に対比されるものなどである(注5)。

土師器（第10図1・2）

暗黒褐色有機砂質土層より出土したが、その多くは破片であった。完形に近いものは第1トレンチで出土した1個体にすぎない。第10図1は完形品で、口径18cm、くびれた頸部の外径15cm、底径6.7cm、高さ約47cmをはかる甕である。胎土はきわめて細かく茶褐色を呈し、炭素分を下部に吸収している。肩部から腰部にかけては櫛状器具による条痕がみられる。第10図2は胴部以下が欠損した甕である。が、口径18cm、頸部の外径15cmで、肩部には櫛状

具による整形痕が残存している。第10図1は土師器であるが、整形されて焼しまった粘土に附着していた（第5図上段）。これ以外の土師器は小破片で個体数・器形などを明確にすることは不可能である。第10図の1・2は関東地方の真間式土師器に近似している（注6）。

須恵器（第12図6）

出土した器種には坏と甕がある。坏は口辺部と底部の破片が検出された。口辺部は身の立上がり幅が狭く、傾斜は45°近くをはかる。底部には角形高台が付されている。

甕の破片は頸部と胴部である。頸部の外面にはたたき痕が付され、内面には青海波がみられる。胴部も頸部と同じように外面にたたき痕、内面には青海波が付されている。

この須恵器は奈良朝様式の須恵器である。形式は明確でない。

平安朝甕器（第11図58～65、第12図1～5、第13図40～43、第15図25～28、第16図40・41）破片であるが、すべて灰釉が施されている。器形には碗と瓶および皿の3形態である。

碗の口辺部には、口端を丸く仕上げ外反したもの（第12図1・第15図27）、口端の一部分を内側にまげた輪花碗の口辺（第11図65）の2形態がある。底部はすべて高台が付されているが、その形態には断面が角ばったものと断面が内彎したものと2形態がみられる。前者の高台は平安朝甕器第1型式の碗の高台に、後者の高台は平安朝甕器第2型式の碗の高台にみられるものである。

瓶は口辺部と胴部が検出された。口辺部は口径10cmで、口端がたれ下がっている（第11図63、第13図43）。胴部は小破片であるが、表面に灰釉が美しく施されている。

皿は平皿（第11図61・62）と段皿（第11図59・60）の2種類が検出されている。ともに縁辺部が欠損していて詳細は明確でないが、底部にはすべて高台が付されている。その高台には、内側に段を有した断面が角ばったものと段を有しない断面が角ばったものと2形態がみられる。ともに平安朝甕器第2型式の皿の高台にみられるものである。

行基焼（第13図37）

採集した行基焼の種類は山茶碗と山皿とがある。完形の山皿（第14図37）以外はすべて小片である。これらはすべて茶褐色有機砂質土層より出土した。

山茶碗の底部には、高台の付されているものと高台のないものとがある。付されている高台は断面がひしゃげた逆三角形をなし、畳付きには稜の痕がみられる。

山皿は口径8cm、高さ2cm、深さ1.5cm、底径4.3cmで、底面には高台が付されていない。

これらの型式は行基焼第2型式に比定されるもので、年代は熱残留地磁気方位年代測定の結果13世紀に編年されている。

古瀬戸陶器

天目茶碗と平茶碗の2種類で、ともに古瀬戸釉が施されている。これらは黄灰色有機砂質

土層より出土した。

内耳鍋 (15図24)

第1トレンチの第2層である黄灰色有機砂質土層から出土した。口辺部のみであるため、全容を明確にすることは困難である。が、口径は26cmで、口端は平坦に仕上げられており、その幅は約8mmである。古瀬戸陶器と同じ黄灰色有機砂質土層より出土した。

製塩土器 (第11図1～57、第12図9～31、第13図1～36、第15図1～22、第16図1～38・42、第17図1～20・23～37)

第1次・第2次の2回に亘る調査で、他の遺物に比して圧倒的多量に出土した土器は製塩土器である。すべて欠損しているが、各トレンチから出土し、その多数は脚部である。

脚部の形態には袋形と角形がある。袋形脚 (第12図17、第16図42、第17図20) は先端が欠損しているものばかりで、3例検出されている。その一つは中空の径は1cmほどである。他の1例は現存部の長さ8cm、中空の径1.5cmである。3例とも表面には指痕が明確に存し、中空の内面には竹管の節状痕がみられる。これらは竹管の先端に粘土塊を固着させて中空を造りあげたものと考えられる。角形脚は碗の付け根がもっとも太くて先端になるにしたがって次第に細くなる棒状を呈している。長さは10cm内外で、最も太い部分の径は約3cmである。角形脚の表面には手造りを明確に示す指痕を有するものと整形痕の条線の見られるものとの2種類がある。袋形脚は第2様式、指痕を有する角形脚は第3様式、細条線を有する角形脚は第4様式と、久永、杉崎氏らの先行論文で分類されている。

口辺部や胴部の厚さは3mm程度できわめて薄く、その内外面には指痕が残存した粗製である。口辺部は口端をやや肥厚させているものと口端が外反しているものとの2形態がある。その口径は10cm内外である。とくに第5トレンチで、碗部の比較的大きい破片と角形脚とが接近した状態で検出された。これが同一個体とすれば高さ約20cm、口径11cm、碗の深さ約11cm、角形脚の長さ10cmをはかる (第17図22)。

2. 土製品

土製支脚 (第18図)

出土した土製支脚はすべて棒状であるが折損している。このため全長は明確でないが、現存する最長の支脚は長さ24cm、太さ5cmで黄褐色を呈している。表面には棒状に仕上げるために使用した「すの子」の痕が残っている。この痕跡から察して「すの子」は葦などの細い茎を編んだものと葦など長い葉を編んだものとの2種類がある。

土錘 (第12図7)

第1トレンチの貝層より出土した。形態は中央部をもっとも太く仕上げた管状形である。その長さは3cmで、中央部に4mmの紐通し孔が付されている。

3. 石器

出土したのは一例にすぎない。第4トレンチの基盤である砂層より出土した。長さ11cm、最大幅3cm、厚さ約1cmの剥片の一端に第2次加工を加えて刃状にした石刃である(第12図8)。

4. 貝類

貝層を組成している貝類である。その種類は次のとおりである(注7)。

(1) 斧足類(二枚貝類)

- ・オキシジミ *Cyclina sinensis* (GMELIN)
- ・マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)
- ・ハイガイ *Anadara* (*Tegillarca*) *granosa* (LINNE)
- ・ハマグリ *Meretrix lusoria* (RÖDING)
- ・ヤマトシジミ *Corbicula japonica* (PRJME)
- ・ウネナシトマヤガイ *Trapezium* (*Neotrapezium*) *liratum* (REEVE)

(2) 腹足類(巻貝類)

- ・フトヘナタリ *Cerithidea rhizophorarum* ADAMS
- ・ヘナタリ *Cerithidea* (*Cerithideopsisilla*) *Cingulata* (GMELIN)
- ・ウミニナ *Batillaria multiformis* (LISCHKE)
- ・イボウミニナ *Batillaria zonalis* (BRUGUIERE)

以上、二枚貝類は6種、巻貝類は4種の合計10種が検出された。これらは砂泥性の遠浅の海底に棲息している海水産貝類である。

5. 獣骨

獣骨類の出土量はきわめて少ない。判別できる骨はシカとカメの骨である。シカの骨は椎骨・肋骨・側頭骨岩様部である。カメの骨と推定されたものは、細片であるため、どこの部分であるかは不明である(注8)。

第5章 後論

1. 惣作遺跡の変遷

惣作遺跡からは多種多様の遺物が出土し、歴代遺跡であることを物語っている。本項はこの遺物を通して惣作遺跡の変遷を考えてみたい。

惣作遺跡の成立は弥生時代中期前葉に始まる。この遺物として知多半島地方で弥生中期前

葉に編年されている野崎遺跡第II群の土器が出土している。ついで知多半島地方で弥生中期中葉に編年されている獅子懸式土器が出土している。この両者の土器の時期には知多半島において独立した文化圏が形成されており、惣作遺跡もこの文化圏に属していたことが知られる。対岸の泉田台地では瓜壺式土器が出土しており、弥生中期中葉には三河地方の瓜壺式土器文化圏に属していた。これが弥生中期後葉にいたると、尾張から遠江西部までの地域を統一した長床式土器が出土しており、対岸の泉田台地にも長床式土器が出現し、同一土器文化圏に統一される。

弥生中期前葉から中期後葉にいたる土器は基盤である砂堆中より混出した。この状態は基盤の弱い地帯の遺跡でしばしば認められるように、砂堆上の遺跡における堆積物が安定せず、崩壊した結果と考えられる。しかし二次に亘る調査では弥生後期の遺物は検出できなかった。

次の時代は第10図の土師器の時代である。この時期にいたると、弥生中期以後断絶していた惣作の地に再び集落が形成される。第10図の土師器は関東地方の土師器型式の一つである真間式土師器に近似しており、真間式土師器の年代とさほど隔たりのない時期である。真間式土師器の年代は7世紀中葉に比定され、大化の改新の進行期に該当するとされている。この時期に形成された層序は最下層の暗黒褐色有機砂質土層（第1トレンチ）で、第3様式の角形製塩土器が出土する。惣作における製塩の開始期である。

土師器に続いて古式の土器は奈良朝様式の須恵器である。奈良朝様式須恵器は東海地方においては2型式4時期に編年されている(注9)。この年代については、その上限は明確でないが、下限は平安時代前期にいたると考えられる。それは10世紀初頭に編纂された『延喜式』に瓷器を朝廷に貢納した国として尾張、三河があげられており、奈良朝様式須恵器の後統陶器である平安朝瓷器の出現が明確になっている。また奈良朝様式須恵器と平安朝瓷器とを焼成した窯址からは、淳和天皇の離宮である「淳和院」銘のある奈良朝様式須恵器が出土した例が知られている。これらの資料から推定して、奈良朝様式須恵器の終末を9世紀に求めることが妥当であろう。惣作遺跡出土の奈良朝様式須恵器の型式は明確でないが、各トレンチの黒褐色有機砂質土層と第1トレンチの貝層より出土した。これに伴出した遺物には製塩土器と第6トレンチ出土の土製支脚がある。第6トレンチの黒褐色有機砂質土層下部からは第4様式の製塩土器のみが出土したが、他のトレンチの黒褐色有機砂質土層からは第3様式製塩土器と第4様式製塩土器とが混出した。

奈良朝様式須恵器については平安朝瓷器がある。平安朝瓷器には第1型式のみみられるが、第2型式が多い。平安朝瓷器第2型式の指標である有段皿も数枚出土している。第1型式の平安朝瓷器も、第2型式の平安朝瓷器とともに、黒褐色有機砂質土層から混出状態で製塩土器と伴出した。伴出した製塩土器の出土量は比較的多量であるが、製塩土器も第3様式と第

4 様式とが混出状態で検出されている。この黒褐色有機砂質土層は平安朝甕器期に攪乱されたと推察される。攪乱の原因は明確ではないが、この惣作の地に神社が鎮座していたという伝承から考えて、人工的攪乱であろう。なお、平安朝甕器第2型式窯は大府市の丘陵地で確認されており、交易を思わせる(注10)。

黒褐色有機砂質土層の上位層は黄褐色あるいは茶褐色の有機砂質土層で、行基焼あるいは平安朝甕器と角形製塩土器を出土する。

知多半島地方では行基焼を藤四郎焼と称し、大府市はもちろん、知多丘陵の各地で多量に採集され、その窯址が確認されている。惣作遺跡から出土した行基焼は知多半島地方で行基焼第2型式として分類されているそれと同一形態である。第2型式の行基焼は熱残留地磁気測定の数値によって13世紀に編年されている。行基焼第2型式期に属する窯址は、惣作遺跡の所在する横根町の丘陵地でも発見されており、黄褐色有機砂質土層より出土した行基焼は横根町所在の行基焼窯で生産された可能性が濃厚である(注11)。

黄灰色砂質土層からは行基焼・古瀬戸陶器・土釜・内耳鍋などが出土している。これらは中世終末期から近世初頭に編年されている陶器類である。とくに古瀬戸陶器は瀬戸地方で生産されたもので、この地と交易があったことを示している(注12)。

以上が出土遺物を主とした惣作遺跡の歴史的要因の概括である。惣作の地は断続的ではあるが、弥生時代中期前葉より近世にいたるまで、海浜集落が形成されていた。その最盛期は製塩土器が示すように製塩が生産活動の中心であった時期であると考えられる。層序的には第1トレンチで確認された暗黒褐色有機砂質土層をえて黒褐色有機砂質土層下部層の時期である。

2. 弥生時代の惣作遺跡

衣ヶ浦湾沿岸には、縄文時代早期より近世にいたるまでの海浜集落址が現在も多く存在している。これらは台地の縁辺あるいは丘陵の傾斜地にすべて立地し、その多くは貝塚である。このため、研究者たちは、長年、衣ヶ浦湾沿岸においては海浜集落址が沖積低地に存在しないと考えていた。ところが、昭和31年、惣作の地で古代海浜集落址のみから出土する角形製塩土器が採集され、古代海浜集落の遺跡であることが判明した。以来、衣ヶ浦湾沿岸では角形製塩土器と伴出した最も古い土器である土師器期以降沖積地化がすすみ、地域によっては沖積低地上に古代集落址が形成されていると考えられるようになり、沖積地が目されるようになった。

さらに、昭和41年、東浦町誌を執筆するために東浦町内を踏査したところ、知多郡東浦町緒川字塩田しほたからも角形製塩土器と奈良朝様式須恵器および土製支脚が伴出したことを知った。この衣ヶ浦湾沿岸の沖積地に形成された古代海浜集落址の資料の増加をえて確信を深めた。

塩田遺跡は惣作遺跡の南方約3kmの標高2mの地に形成されており、地形的には衣ヶ浦湾西岸の沖積地上に立地している(注13)。

惣作遺跡や塩田遺跡が立地する標高2mの地は、高潮でもあれば直ちに海水を被る位置である。現在、衣ヶ浦湾沿岸ではこの両遺跡よりも標高的に下位の地に海浜集落遺跡は確認されていない。

土師器期から奈良朝様式須恵器期の製塩遺跡であると考えられていた惣作遺跡は、第1次・第2次の発掘調査によって基盤の砂堆の中より弥生土器が検出され、惣作遺跡の始源期が弥生時代中期前葉までさかのぼることができ、衣ヶ浦湾沿岸における沖積地に形成された最古の海浜集落址であることが判明した。

また大府市内で、惣作遺跡出土の弥生式土器にもっとも近い土器は、大府市大府町椋敷の台地上に所在する椋敷貝塚から出土した縄文時代終末期に編年されている条痕文系土器である(注14)。が、衣ヶ浦湾沿岸において、弥生時代の遺跡は刈谷市泉田町宮東第1号貝塚をはじめ十数ヶ所確認されている。なかでも、惣作遺跡出土の弥生式土器と時期を同じくする遺跡には、古くから知られている宮東第1号貝塚がある。これは惣作遺跡の対岸に泉田台地と称する衣ヶ浦湾に向ってのびた舌状台地の縁辺に形成されている。このため、惣作遺跡で弥生式土器が発見されるまでは、境川沖積地は規模の大きい弥生遺跡を有する本曾川沖積地・矢作川沖積地・豊川沖積地と異なり、前記の河川が堆積した沖積地よりも時代的に遅れて沖積地化が進んだと考えていた。しかし、惣作遺跡で弥生時代中期の野崎第Ⅱ群土器の出現によって、沖積地の広狭はあるが、前記河川と同時代に沖積地化が進行していたことを知り、これまでの説が改められた。

惣作遺跡で検出された弥生式土器は弥生中期に属するといっても、発掘面積のせまきにもよるが僅少にすぎない。そのうえ、多量に出土した角形製塩土器とは年代的にも相当なへだたりがあり、その間の隔絶をしめしている。この資料に関する限り、横根町惣作の地においては弥生時代の海浜集落が漸進的に発展して、角形製塩土器の時期にいったとは考えられない。しかし、衣ヶ浦湾周辺を一つの単位として展望した場合には、これとは違った結果になる可能性がある。例えば、対岸の泉田台地には前記の弥生時代中期前葉の瓜罎式土器を出土する遺跡をはじめ、弥生時代後期、古墳時代へと続き現代にいたるまでの歴代遺物を出土する泉田貝塚群(注15)が現存し、弥生時代中期より漸進的ではあるが、海浜集落が継続的に発展している。そして、この泉田貝塚群も惣作遺跡と同様に、古墳時代後期より平安朝甕器期にいたる間が最も発展した時期で、附近には古墳や平安朝甕器を生産した窯跡まで確認されている(注16)。泉田貝塚群は集落を開始した時期より貝塚を伴った古代海浜集落址であり、始源期である弥生時代中期に貝塚を形成しなかった惣作遺跡とは対照的である。この対

照的現象は弥生時代の特色をなす農耕地の広狭によるものではなかろうか。せまい衣ヶ浦湾をはさんだ西岸と東岸との集落上の対象は、とりもなおさず土器文化圏の対象でもある。すなわち、西岸における弥生中期前葉の野崎第Ⅱ群土器文化圏に対しては、東岸の三河では瓜郷式土器文化圏が、弥生中期前葉にいたると西岸の獅子懸式土器文化圏に対しては、東岸では下長山式土器圏が、それぞれ成立して相対した。これが弥生中期後葉には尾張も三河も長床式土器文化圏に統一されると、東岸にも貝塚を伴わない遺跡が出現する。

惣作遺跡附近の地質、地形については「第1章地形と位置」で記述したが、衣ヶ浦沖積地を縦断する中部電力知多火力線新設第一期工事のボーリング資料は地質を一層明確にする(注17)。これによれば、惣作遺跡附近には地表から約2mの下位に厚さ約1.5mのシルト質中粒砂層が存在し、さらに小礫混り粗粒砂層が続いている。この両層からは海産貝類の殻が検出され、かつては遺跡附近まで衣ヶ浦湾が入込んでいたことを示している。と、ともに両層の境が沖積層と洪積層との境でもある。約2mの地下より堆積活動を開始し、沖積地化が次第にすすみ、弥生時代中期前葉の野崎第Ⅱ群土器期にいたって惣作遺跡一帯が生活の舞台として活用できるほどになった。しかし、惣作遺跡の後背には、知多丘陵の支谷を流れて衣ヶ浦湾にそそぐ明神川湿地が存在している。明神川湿地と惣作遺跡地との比高は、伊勢湾台風の高潮現象の場合、前者は完全に冠水し、後者は冠水しなかった差がある。明神川湿地は弥生時代のころも、湿地をなしていた。惣作遺跡を形成した弥生文化人は、この明神川湿地を後背湿地とし農耕を営んでいたであろうと推察される。

3. 衣ヶ浦湾沿岸における古代製塩

古代製塩に関する語句として「藻塩焼く」は余りにも有名である。この「藻塩焼く」とは、製塩工程の濃縮と煎熬を同時に表現した語句と考えられ、藻は乾燥させてその上に濃塩水を注いで更に濃度の高い塩水をつくるいわゆる濃縮工程に使用されたといわれている。そして煎熬工程には小形土器を使用したというのが定説になっている。この小形製塩土器には三河湾・伊勢湾沿岸地方では角形土器をあてている。

角形製塩土器は三河湾・伊勢湾沿岸地方の古代海浜集落のみから採集され、古代海浜集落の代表的指標物とされている。衣ヶ浦湾沿岸で角形製塩土器を出土した遺跡は約25ヶ所を数えるが、その遺跡の大多数は角形製塩土器を数個出土したのみである。しかし、これらは必ず古墳時代須恵器や土師器あるいは奈良朝様式須恵器と伴出している。惣作遺跡においても例外でなく、角形製塩土器は土師器および奈良朝様式須恵器と伴出している。

延喜式によれば、塩が庸・調として賦課された国として、次の国名があげられている。

- ・庸、調ともに賦課された国——伊勢 尾張 備前 備中 備後 安芸 筑前
- ・調として賦課された国——若狭 播磨 周防 紀伊 淡路 讃岐 伊予 肥前 薩摩

・庸として賦課された国——三河

これら17ヶ国は波静かな内海に面した国々で、製塩には最適の地である。伊勢の古代製塩は伊勢神宮と深い関係をもち、現在も伊勢神宮で伊勢湾の海水を利用して土器製塩法による製塩を行なっている(注18)。尾張も内海に面しており、製塩には最適の地と考えられ、尾張の沿海部で古代製塩が盛んに生産されていたことを思わせる。塩道神社、塩田天神、塩江神社、塩門神社など尾張の古代の記録に所載されているこれらの神社のなかには製塩と関係があったものがある。

なかでも、尾張に製塩が発達して、その製品を朝廷に納めていたことを決定づけたのは、平城宮跡から出土した木簡である。

- (1) 『尾張国智多郡番賀郷花井里丸マ□麻呂』
(調塩三斗 神亀四年十月七日)
- (2) 『尾張国智多郡贊代郷倉里戸主和尔部色大智調塩三斗 天平元年』
- (3) 『□□□具郷野間里和尔部臣牟良 御調塩』
(□平元年十月十九日 □長 和尔部安部)
- (4) 『尾張国知多郡富具郷野間里□□□』
(塩三斗 十月五日)

三河が古代、朝廷に塩を納めていたことを証明する木簡も出土している。

- (5) 『參河国渥美郡大壁郷海部首万呂 調塩一斗』

三河は延喜式によれば庸塩を貢納していたが、(5)の木簡によると調塩を納めている。これは奈良時代と平安時代との差異と考えるが、いずれにせよ、(1)～(5)の木簡に銘記されている郷名は、和名抄に所載している同名の郡内にも記されており、その郷域には古代製塩遺跡が多数確認されている。この製塩遺跡は知多郡では伊勢湾沿岸に、渥美郡では内海である三河湾沿岸に所在している。なかでも、知多郡では(1)の番賀郷と木簡にはないが但馬郷に集中している。この古代製塩遺跡からは角形製塩土器が古墳時代須恵器や土師器および奈良朝様式須恵器と伴出していることが知られている。この角形製塩土器を指標として、最近では知多半島東岸や西三河沿海地方においても製塩遺跡の調査がすすめられ、遺跡数も次第に増加している。西三河沿海地方や知多半島東岸、すなわち衣ヶ浦湾沿岸においても古代製塩が盛行し、調塩・庸塩の賦課国としての任務をはたしていたことが知られる。

衣ヶ浦湾沿岸における古代製塩に関する記録は、延喜式に記載されている『生道塩 一斛六斗与調塩共造』があげられる。生道は生産地名で、現在の知多郡東浦町大字生路がこれにあたる。生道塩については延喜式大膳に『東寺中台五仏左方五菩薩右方五忿怒料 生道塩日別五合七勺……略……』とある。生道塩は生産地名を冠するほどであるから、一般の塩とは

異った塩であったと思われる。とくに生道塩は「……堅塩也、大如大瓮、元一顆、搗得塩一斗許、生道尾張国郡里名也」とあり、生道塩が大甕ほどの堅塩で粉状にすると一斗ほどになる量であったことを示している。これほどの堅塩の製造には、現在、伊勢神宮で行われている堅塩づくりから考えて、特製の塩釜と荒塩をつくる多量の小形の土器を必要としたであろう。この塩釜は惣作遺跡の出土破片から推測すると、その大きさは腹径36cmの平底の甕であろう。この大型平底土器の熱効率の悪さを改良するために考案されたのが土製支脚であろう。知多半島において、土製支脚は伊勢湾沿岸ではその出土例をみないが(注14)、東岸の三河湾沿岸では惣作遺跡をはじめ塩田遺跡、取手貝塚ですでに確認されている。これらの遺跡は三河湾の奥部・衣ヶ浦湾の沖積地に形成されており、生道塩の生産地である生路に親近の距離にあり、角形製塩土器も奈良朝様式須恵器とともに出土している。衣ヶ浦湾沿岸の古代製塩は生道塩のような特製塩と伊勢湾沿岸でも生産された一般塩との2種類の塩を生産していたのではなかろうか。

さらに、延喜式大膳に記された生道塩は食用以外に祭 用など広い用途を有していたことを示している。この生道塩の生産された奈良朝様式須恵器期には衣ヶ浦湾沿岸において角形製塩土器が多量にしかもその遺跡数も増加していることは塩の増産化を物語るものである。塩の増産は食用としての塩の需要が増加したと考えるよりも、むしろ用途が多様化したとみるべきであろう。そして、全国的には生産地によって塩の質など特色を有する塩が生産され、固有名詞が冠せられる塩も出現したことであろう。生道塩はその代表的例である。

現在、生道塩が生産された知多郡東浦町生路の地に伊久智神社が鎮座している。この神社は、尾張国神名帳の智多郡の項に記載されている。「従三位 伊久智天神」であり、生道塩を生産した人々が祀ったと伝えられている。伊久智神社の所在する東浦町で角形製塩土器を出土した遺跡には、石浜貝塚、入海貝塚、取手遺跡、塩田遺跡がある。石浜・入海の両貝塚は縄文式土器を主体とした遺跡で、角形製塩土器の出土量は数例にすぎない。しかし塩田遺跡は標高2mの砂堆上に形成され、角形製塩土器の出土量は多く、土製支脚と奈良朝様式須恵器を伴出している。現在遺跡の所在する小字名までが塩田と称され、その製法は異なるがこの一帯で近世まで製塩が盛行していた記録が現存している(注20)。塩田遺跡の所在地一帯、すなわち衣ヶ浦湾奥部の西岸が製塩に最適の地であったことを物語っている。

塩田遺跡と立地状態が酷似している惣作遺跡附近の大府市で製造が近世のころまで行われていた記録はみあたらない。古代における大府市の沿海地域は智多郡英比郷に属したとか、あるいは愛智郡成海郷に属していたとか伝えられているが、その所属した郷は明確ではない。しかし塩田遺跡出土の遺物と同じ角形製塩土器が惣作遺跡をはじめ附近の畑から出土する。古代の大府市は古代製塩地として尾張国に課せられた庸塩・調塩を朝廷に貢納していたであ

ろうし、あるいは有力寺院にも祭祀用塩として納められていたであろう。

このように古代における衣ヶ浦湾西岸は製塩が盛行していた。しかし、この衣ヶ浦湾西岸の製塩に関する古代の記録は生道塩以外にはない。生道塩は古代における衣ヶ浦湾西岸の製塩の代名詞ともいえよう。生道塩という名で代表される衣ヶ浦湾西岸における古代製塩は、その盛行期には海岸の低地の各所に製塩場が開かれていたであろうが、現在確認されている古代製塩遺跡は前記の3ヶ所にすぎない。これは長期間に海水の侵入などによって遺跡が流失したこともあろうし、耕作田に転換されて破壊されたこともあろう。また、塩田遺跡が道路の開きくによって偶然に発見されたように今後の土地造成によって発見される可能性もあろう。いずれにせよ、奈良朝様式須恵器期に古代の土器製塩の終末をつけている。この終末は蒸塩焼から塩浜へ、土器から塩釜への技術改革があった結果と推察される。この新しい製塩は地名に汐田、塩田、塩浜などがあり、近世まで続いていたと考えられる(注12)。

しかし、衣ヶ浦湾東岸には沖積低地に1ヶ所も古代製塩遺跡が確認されていない。古代製塩遺跡の指標である角形製塩土器は西岸と異なり、すべて台地上にしかも少量発見されている状態である。これは台地の縁辺が崖状をなし、その直下まで衣ヶ浦湾が近世にいたるまで入込んでいた結果で、東岸の古代製塩は自給自足的性格が濃厚である。三河国で庸塩や調塩を生産したのは、衣ヶ浦湾沿岸よりもむしろ渥美半島や矢作川下流域であったろうと推察される。

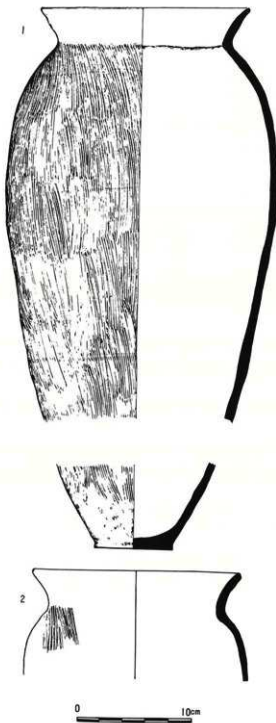
このように、一つの海の西岸と東岸とで古代製塩の生産量およびその性格が異なるところに、衣ヶ浦湾沿岸における古代製塩の特色がある。

- (注) 1. 稲垣健太郎・加藤岩蔵・杉浦正巳「衣ヶ浦湾の成立」 刈谷市教育委員会刊 昭和40年
2. 同上
3. 発表した刊行物には、前記の「衣ヶ浦湾の成立」「刈谷市誌」「東浦町誌」などがある。
4. 杉崎章「八幡のむらのおいたち」(八幡町史資料第2集) 知多郡知多町八幡公民館刊 昭和31年
5. 久永春男「各地域の弥生式土器—東海—」(日本考古学講座4) 河出書房刊 昭和30年
6. 八王子子市中田遺跡調査会「八王子中田遺跡」 東京都教育庁刊 昭和42年
7. 分類は日本貝類学会々員・原田一夫氏、平野大治氏に願った。
8. 東京農工大学教授 農学博士・林田重幸氏の教示による。
9. 加藤、谷沢、久永「刈谷市の古塩」 刈谷市誌編纂委員会刊 昭和33年

10. 大府市吉田町野々宮に所在する野々宮第1号窯がこれにあたる。
11. 惣作遺跡に最も近い行基焼窯跡は大府市横根町・稲荷社古窯で、距離は約800mである。惣作遺跡出土の行基焼はこの附近で生産されたものと考えられる。
12. 赤塚幹也「瀬戸市史 陶磁史篇1」瀬戸市史編纂委員会刊 昭和44年
13. 加藤岩藏「原始古代の東浦」（東浦町誌）東浦町編纂委員会刊 昭和43年
14. 刈谷市小山町在住の谷沢靖氏の資料による。
15. 谷沢靖・加藤岩藏・久永春男「泉田貝塚群」刈谷市文化財保護委員会刊 昭和36年
16. ・9に同じ
・加藤岩藏・斉藤嘉彦・天野暢保「井ヶ谷古窯址群」愛知教育大学刊 昭和45年
17. 1に同じ
18. 「神宮と御塩」伊勢神宮司庁刊 昭和42年
19. 杉崎 章氏の教示による。
20. 知多郡東浦町緒川区有文書「寛永18年・天和3年小川村塩浜検地帳」による。
21. 衣ヶ浦湾沿岸の塩田は条件の変化に伴って、時代とともに耕作田に転換され、次第に南下した。次の表は知多郡東浦町内における塩田の変遷を示したものである。（東浦町誌より）

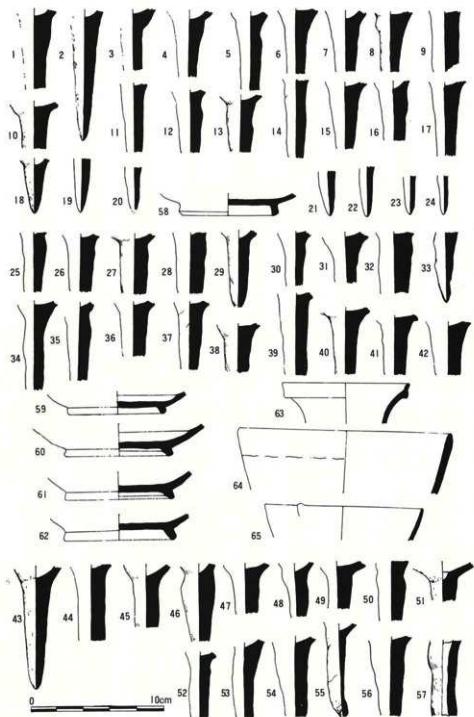
方位	年代		寛文覚書 (1670年)	安永古義 (1770年)	文 化 (1810年)	備 考	
	村名						
北	村 木 村	畝	640.16	畝	556.14	新 田	現在、森岡と称している。
	緒 川 村		576.07	142.28		新 田	
	石 浜 村		613.11	246.02	519.26畝の塩田 を耕地とする		
	生 路 村		178.25	128.00	272.00		文化年間 塩屋6戸
南	藤 江 村			120.12	389.07		明治20年(1888) 塩田485畝 産額1260石 製塩戸数 97戸

惣作遺跡附近の塩田は村木村の北方約4kmの地にあたり、村木村よりも以前に新田化したことであろう。

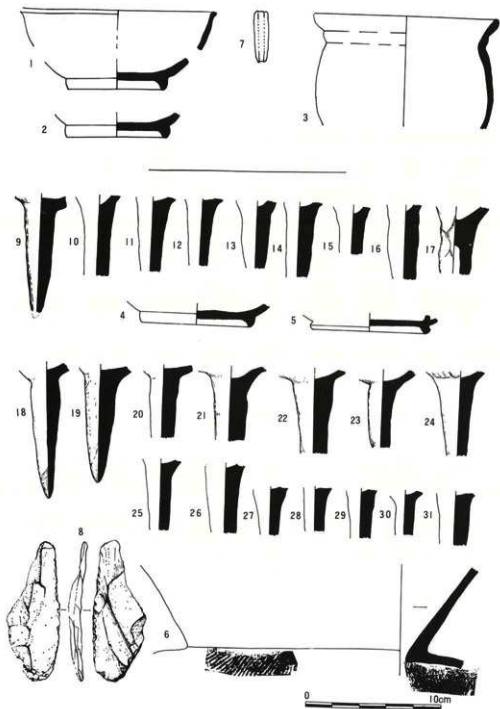


第10図 第1トレンチ出土 土師器実測図

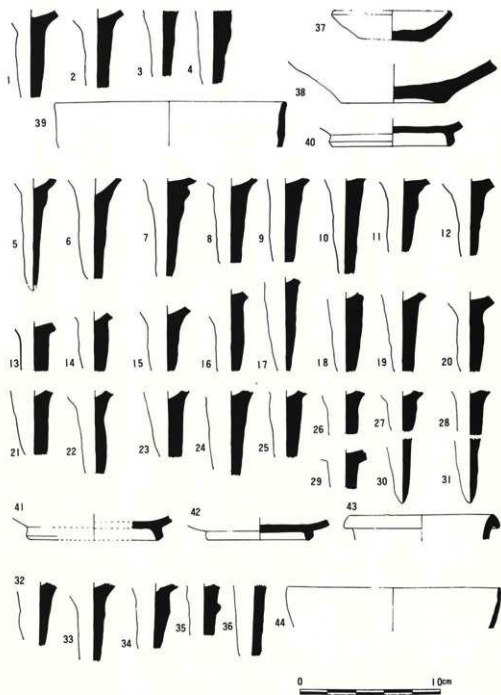
1：第1号土師器 2：第3号土師器



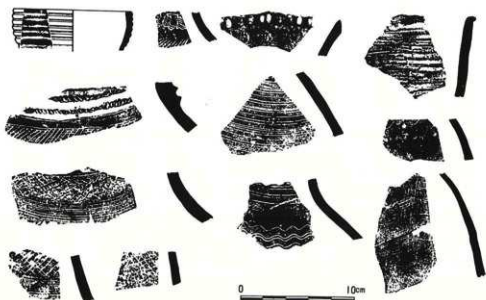
第11図 第1トレンチ出土 遺物実測図



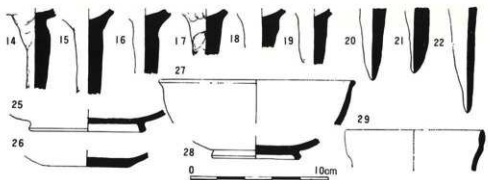
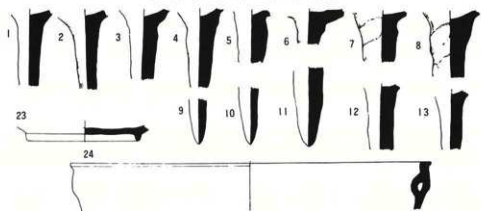
第12図 第1トレンチ・第4トレンチ出土 遺物実測図
 上段：第1トレンチ出土 下段：第4トレンチ出土



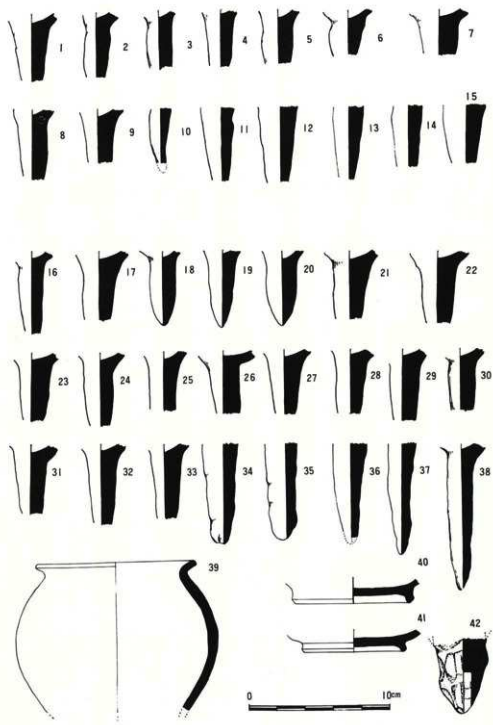
第13図 第2トレンチ出土 遺物実測図



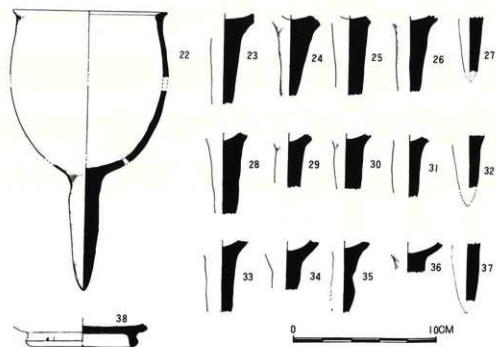
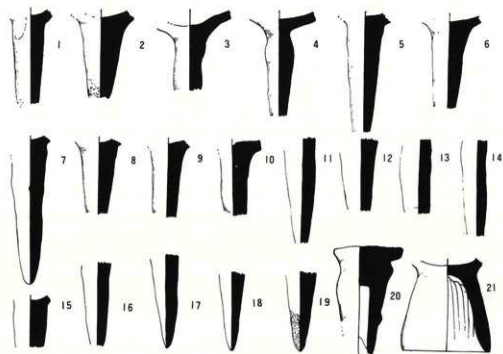
第14図 惣作遺跡出土 弥生式土器拓影



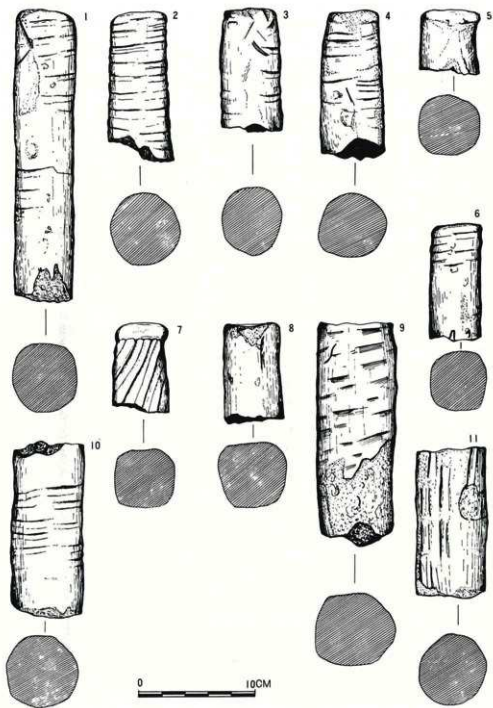
第15図 第3トレンチ出土 遺物実測図



第16図 第5トレンチ出土 遺物実測図



第17図 第6トレンチ・第8トレンチ出土 遺物実測図
 上段：第8トレンチ出土 下段：第6トレンチ出土



第18図 第6トレンチ出土 土製支脚実測図



(1) 空から見た惣作遺跡（黒丸）



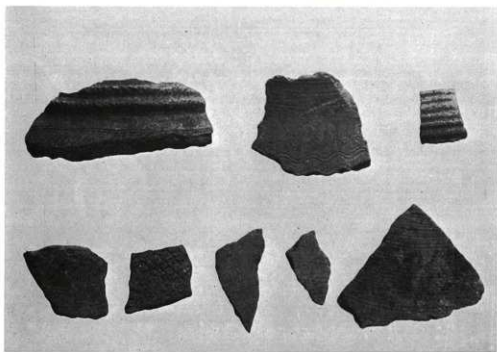
(1) 第1号土師器の出土状態



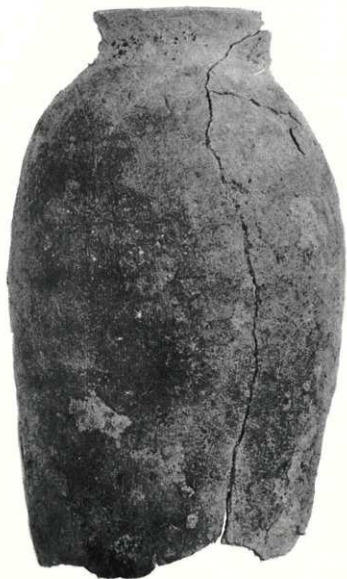
(2) 第2号土師器の出土状態



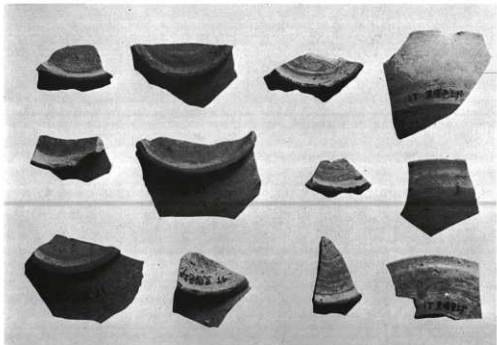
(1) 第3号土師器の出土状態



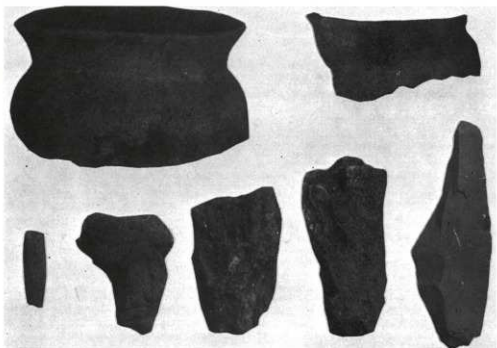
(3) 惣作遺跡出土 弥生式土器



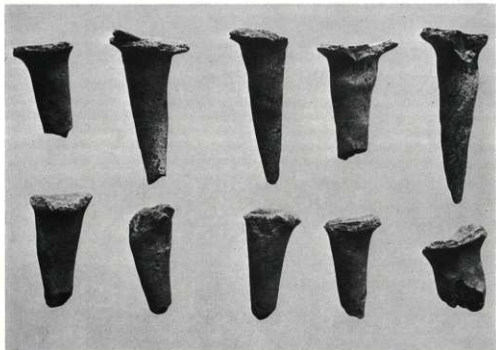
(1) 惣作遺跡出土 土師器 (第1号)



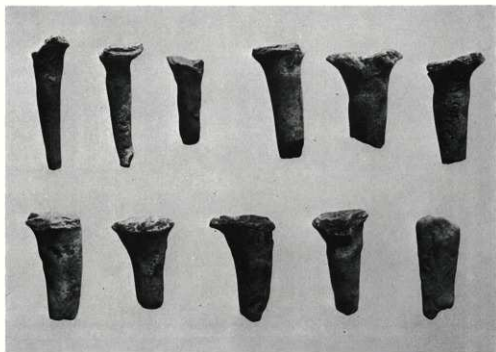
(1) 惣作遺跡出土 平安朝瓷器



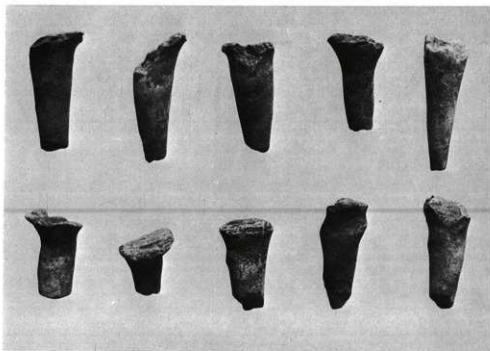
(2) 惣作遺跡出土 土師器 (第3号) 土鍬 土製支脚 石刀



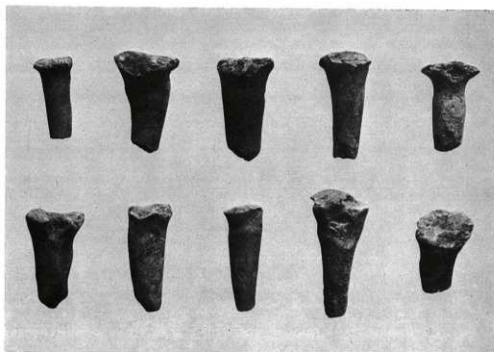
(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その1)



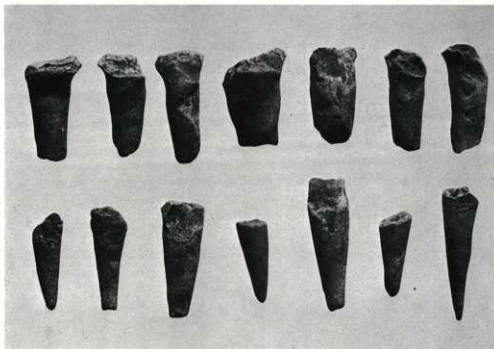
(2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その2)



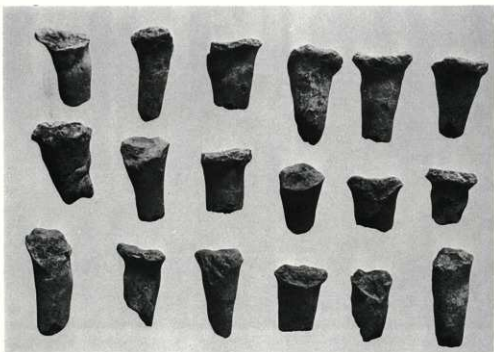
(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その3)



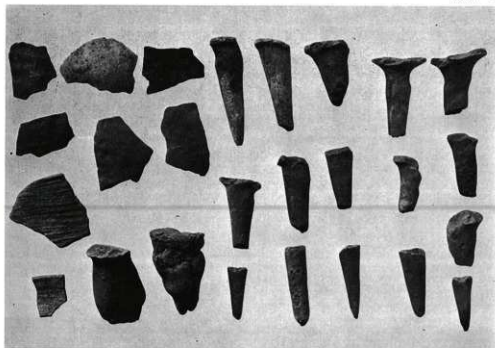
(2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その4)



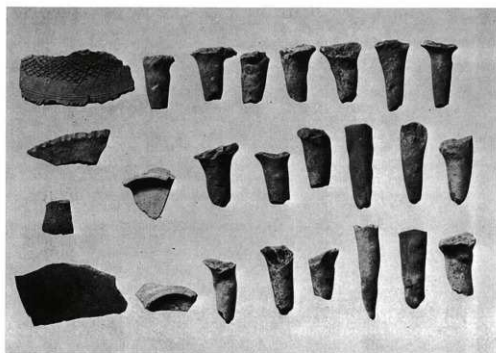
(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その5)



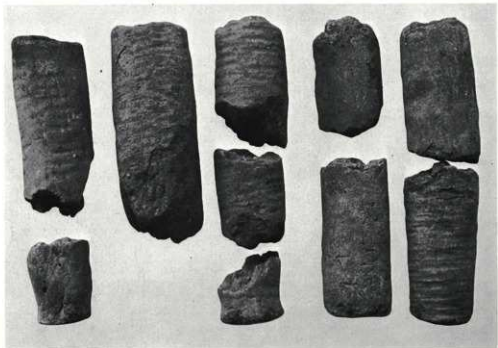
(2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その6)



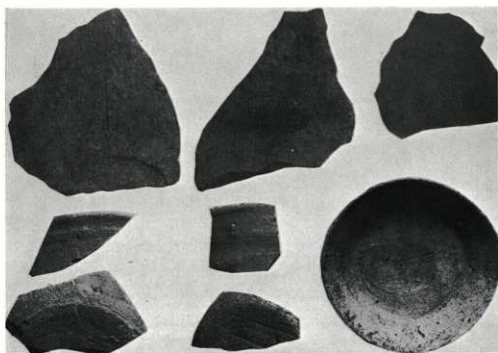
(1) 惣作遺跡出土 角形土器 (その7) 弥生式土器



(2) 惣作遺跡出土 角形土器 (その8) 弥生式土器 平安朝瓷器



(1) 惣作遺跡出土 土製支脚



(2) 惣作遺跡出土 土師器 行基焼

惣作遺跡

昭和47年7月1日

発行	大府市教育委員会 <small>愛知県大府市大府町雨兼</small>
執筆者	加藤岩藏
印刷	大日本印刷株式会社